

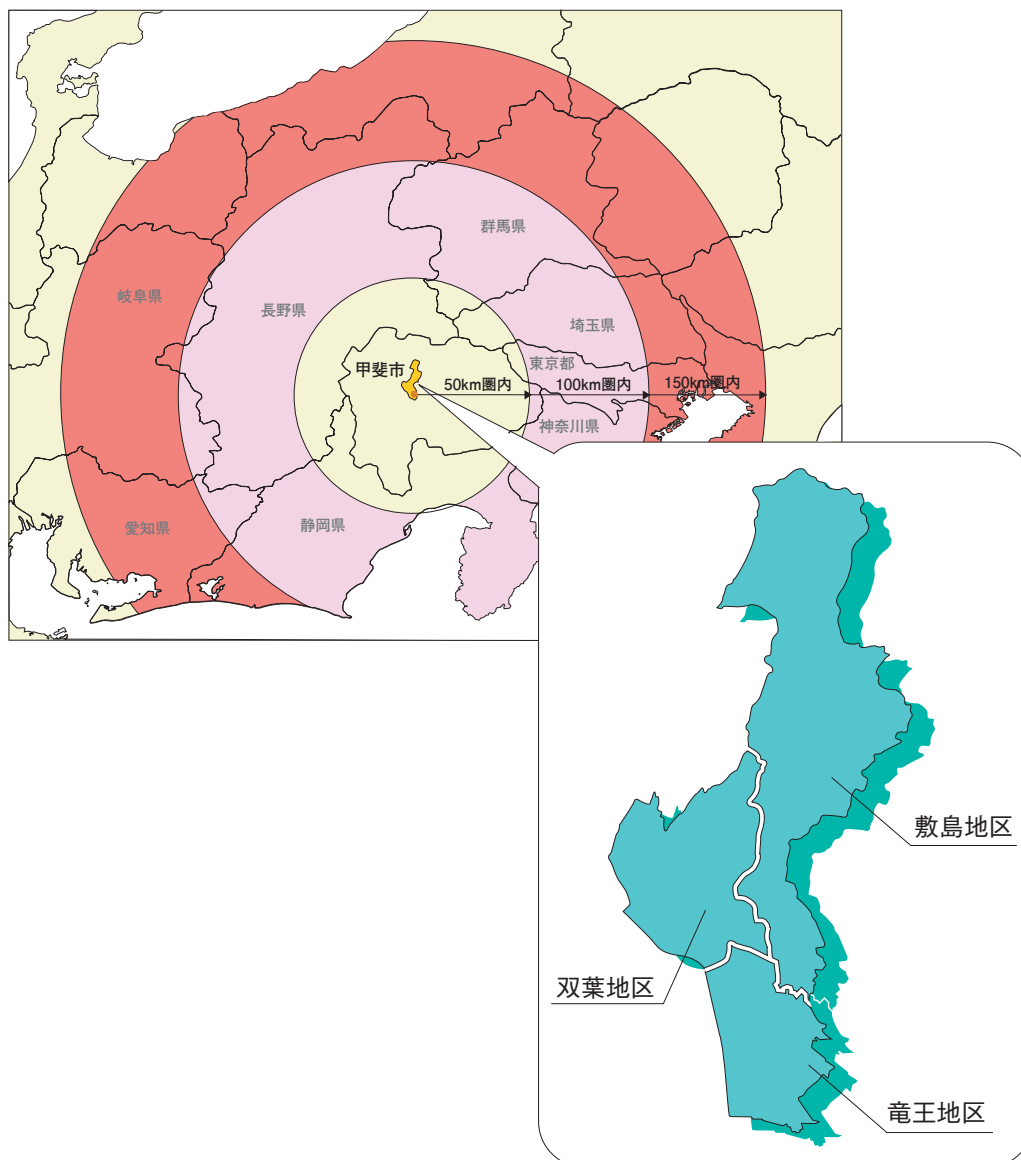
第2章 市のすがた

(1) 位置・面積・気象・自然

甲斐市は山梨県の北西部に位置し、北側は北杜市、南側は昭和町、東側は甲府市、西側は韮崎市、南アルプス市に接しています。

市の北部には丘陵および山岳地域、南部には釜無川左岸の平地が広がっています。また、甲斐市から 50km 圏内には県東部の一部を除いたほとんどの県域が入り、100km 圏内には東京都の世田谷区付近までが含まれます。150km 圏内には、東京都、埼玉県、神奈川県、静岡県、長野県および群馬県のほぼすべての区域が含まれ、この圏域内の人口は 3,500 万人を超えています。

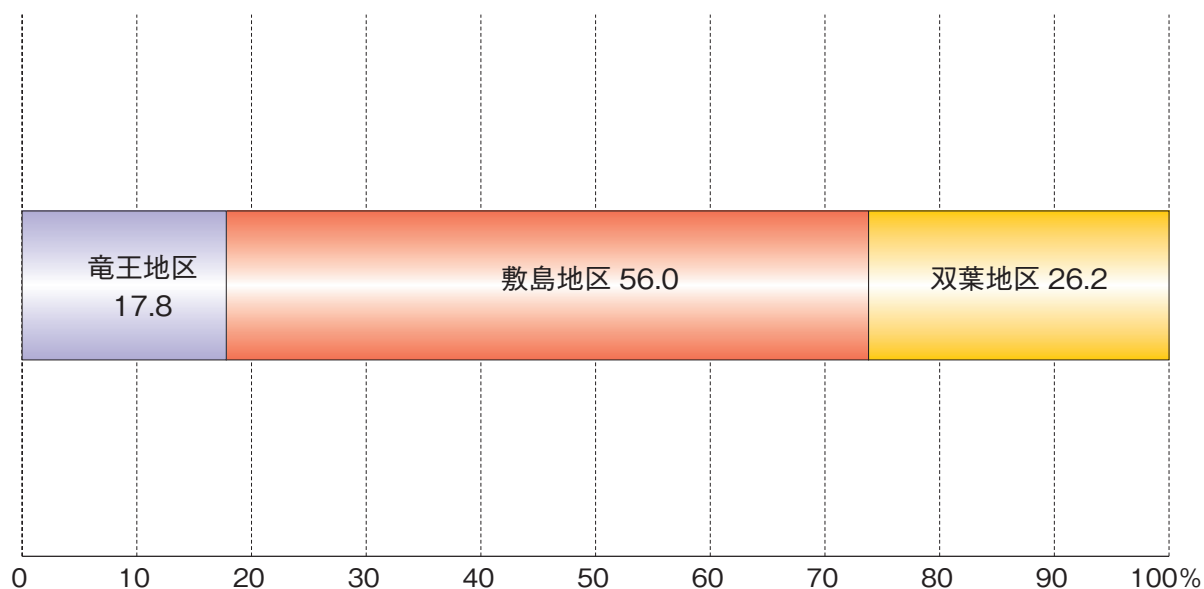
■甲斐市の位置



甲斐市の面積は 71.9km² で、山梨県全体の 1.6% を占めています。地区別には、竜王地区が 17.8%、敷島地区が 56.0%、双葉地区が 26.2% となっています。

本市が位置する甲府盆地の年間平均気温は 14.3 度、平均最高気温は 20.2 度で、平均最低気温は 9.5 度となっています。夏は気温が高く、冬には北西風（八ヶ岳おろし）などのため、朝晩の冷え込みが強い内陸性気候となっています。

■地区別面積表



出典：平成 12 年全国都道府県市町村面積調

² 秩父多摩甲斐国立公園

昭和 25 年 7 月 10 日に秩父多摩国立公園に指定され、平成 12 年 8 月 10 日に秩父多摩甲斐国立公園と名称変更されました。

甲斐市の一部は秩父多摩甲斐国立公園²として、昭和 25 年（1950 年）7 月 10 日に指定されました。本公園は、首都圏の北西部に位置し、標高 2,000 m 級の山脈を中心とした公園です。1 都 3 県に接するこれらの山脈は山梨県の荒川や東京都の荒川のほか、多摩川、千曲川などの源流域になっており、これらの河川に浸食され至る所に深い溪谷が刻まれています。

■自然公園

公園名	所在地	指 定 年月日	面積 (ha)	特別地域 (ha)	普通地域 (ha)	県面積に対する 比率 (%)
秩父多摩甲斐	山梨県（甲府市、甲斐市、北杜市、山梨市、甲州市、丹波山村、小菅村）、東京都、埼玉県、長野県	S25.7.10	46,834	24,452 [*]	22,382 [*]	10.5

※山梨県分の面積

■秩父多摩甲斐国立公園位置図



(2) 歴史とあゆみ

①原始～古代

甲斐市では、発掘調査により敷島、双葉地区を中心に縄文時代早期（約8,000年前）から人々が生活を始めたことが確認され、弥生時代後期（約1,800年前）には現在の大下条地内に県内でも有数の規模を持つ集落（金の尾遺跡）が営まれるようになります。

古墳時代に入ると竜王、双葉地区にまたがる赤坂台地上に赤坂台古墳群と呼ばれる有力者の墓が幾つも築かれました。このことにより甲斐市を中心に有力豪族が存在したことがうかがわれます。

敷島地区で発見された天狗沢瓦窯跡（てんぐさわがようせき）は、約1,300年前に瓦を焼くために築かれた本県最古の登り窯（がま）です。当時瓦は、寺院や宮殿などにしか使われなかったことから、周辺には重要な施設が造られた可能性が高く、当時の甲斐国西側全域を治めた有力豪族の本拠地であったと考えられます。

古代の甲斐市域は本県の約半分の面積を占めた巨摩郡の中心地と考えられています。

②中世

本市域には平安時代から置かれていた志摩荘（敷島地区）、篠原荘（竜王地区）という荘園があり、大規模な集落が存在していたと思われます。その後、甲斐国内は多くの変遷を経て、大永元年（1521年）に武田信虎が飯田河原および上條河原の合戦（敷島地区）において駿河から侵攻してきた今川勢を破り、これをきっかけに甲斐国統一へと進んでいきました。

その子信玄の時代には甲斐国外にも勢力を拡大するとともに、大規模な治水工事が行われ、釜無川の氾濫を食い止めるための川除（信玄堤）が完成しました。棟別銭（家屋に対する税金）を免除し、人々を移住させ竜王河原宿を置き、さらに近隣の村々には堤の修復など管理を行わせました。

武田氏滅亡の際、織田軍の兵火を逃れた光照寺薬師堂は、近世はじめに双葉地区岩森に移築され、昭和46年（1971年）に国の重要文化財に指定されました。

③近世

現在まで続く集落が各地で形成され、近世村落として成立しました。水不足に悩まされてきた現在の双葉地区の台地上では楯無堰が開削されたのをはじめ、市内各地で規模の大小を問わず治水・利水工事が行われ田畑の開発が進み、農業生産高が飛躍的に向上しました。

この時代、甲斐国は甲府藩や幕府直轄領などの支配を経て、徳川御三卿³の一橋家10万石の所領のうち3万石が巨摩郡内に置かれ、延享3年（1746年）から7年間、宇津谷村（双葉地区）にその陣屋が設置されました。また、吉田松蔭らに影響を与えられたとされる学者山県大弐が篠原村（竜王地区）に生まれたのもこの頃です。

³ 徳川御三卿

徳川将軍家の一族で、田安・一橋・清水の三家を言います。御三家と異なり臣下ではなく将軍の家族との位置付けで、幕府から賄い料10万石が給せられ、家老も旗本が出向で勤めました。

産業面においては、江戸後期に煙草、養蚕、木綿、菜種の生産が盛んとなり、特に煙草については、江戸に入る甲州煙草の総称が「竜王」と称されるほど有名な産地となりました。

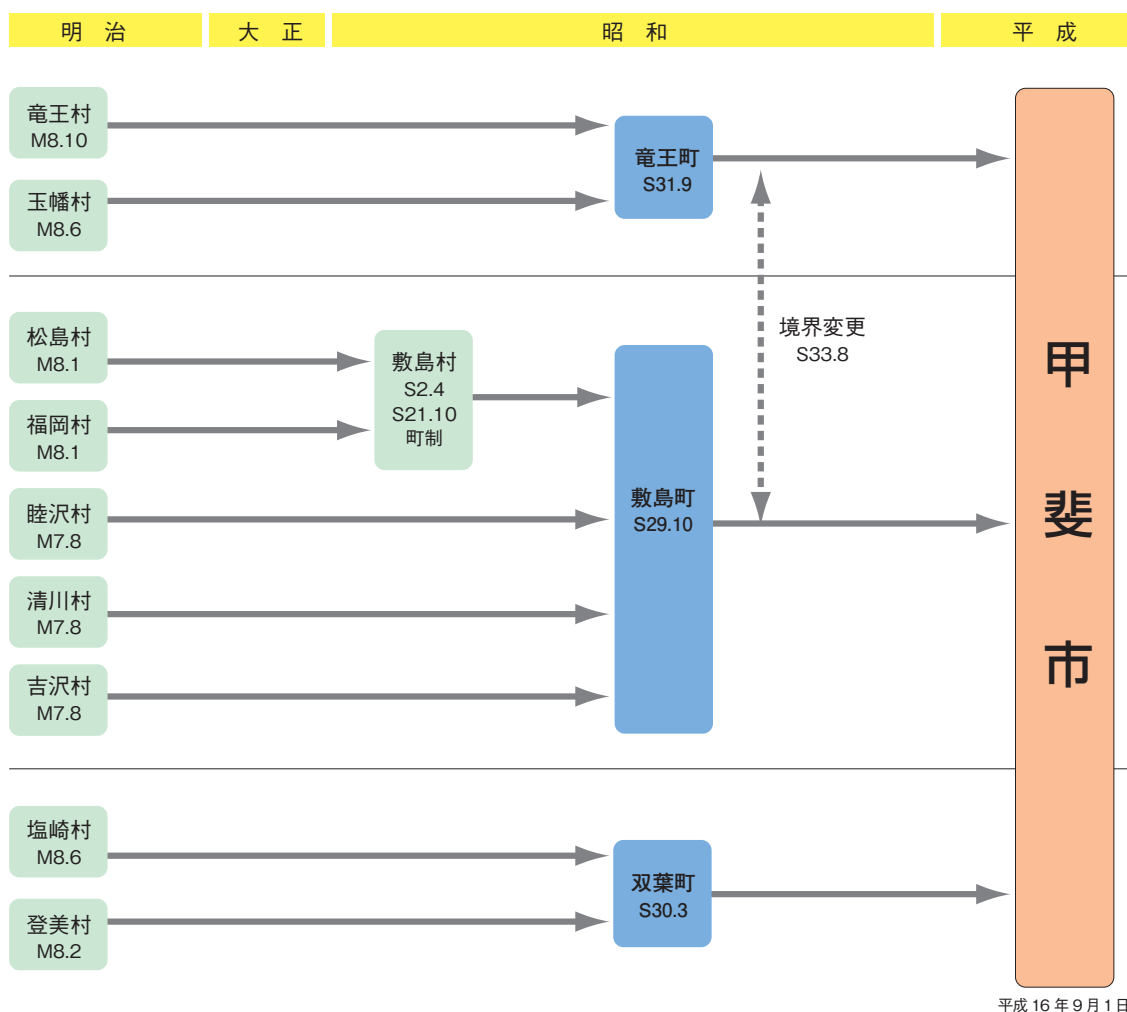
④近現代

近現代に入ると江戸後期から続いた商品作物の生産はさらに拡大し、明治12年（1879年）の農務局の調査によれば、中巨摩の木綿、煙草、菜種の生産量比率は県内第一位でした。また敷島地区では昭和6年（1931年）に蚕糸販売農業協同組合連合会模範社が設立され、さらに、近世から営まれてきた水車精穀業が明治中期から昭和初期にかけて隆盛期を迎え、甲府市場の精米出荷量の約7割を占めていました。

明治以降の区制や郡区町村編成法などにより合併が進み、昭和29年（1954年）から昭和31年（1956年）にかけて、いわゆる「昭和の大合併」により竜王町・敷島町・双葉町が誕生しました。その後急速な都市化が進み、県内でも有数の人口増加地域として発展してきました。

そして、平成16年9月1日、3町の合併により甲斐市が誕生しました。

■甲斐市の変遷

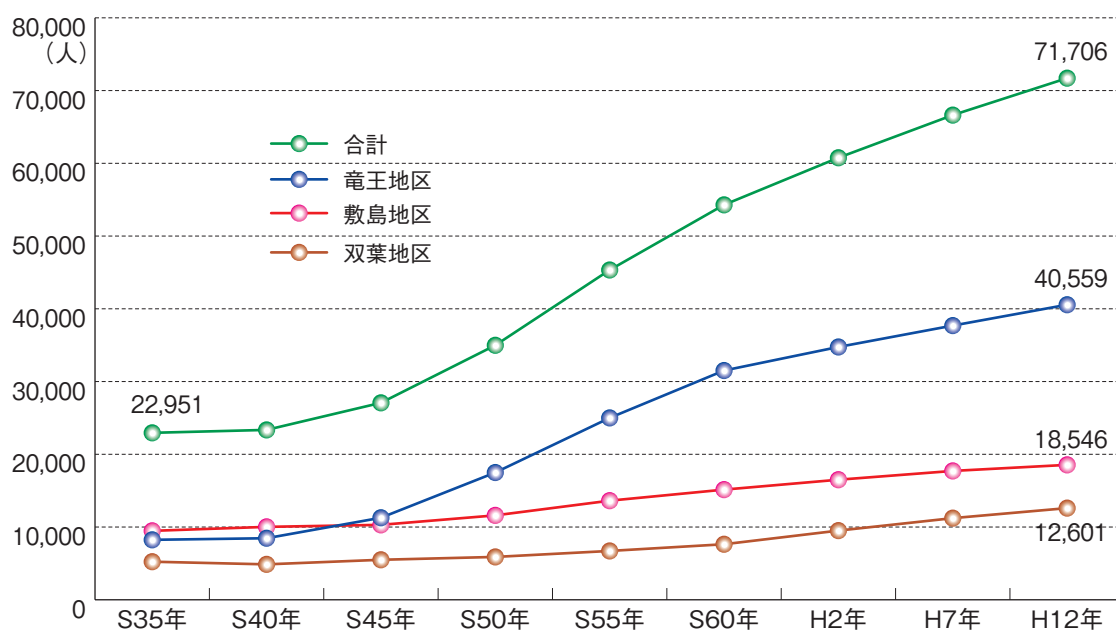


(3) 人口・世帯

①人口

甲斐市の人口は、平成 12 年（2000 年）国勢調査によると 71,706 人で、県全体の 8.1% を占めています。その推移をみると、昭和 35 年（1960 年）の 22,951 人に対し、40 年の間に 3 倍以上の増加をみせています。また、昭和 40 年代を境とした急激な人口増加は、昭和 39 年（1964 年）の国道 20 号竜王バイパスの開通がきっかけとなっていると考えられます。

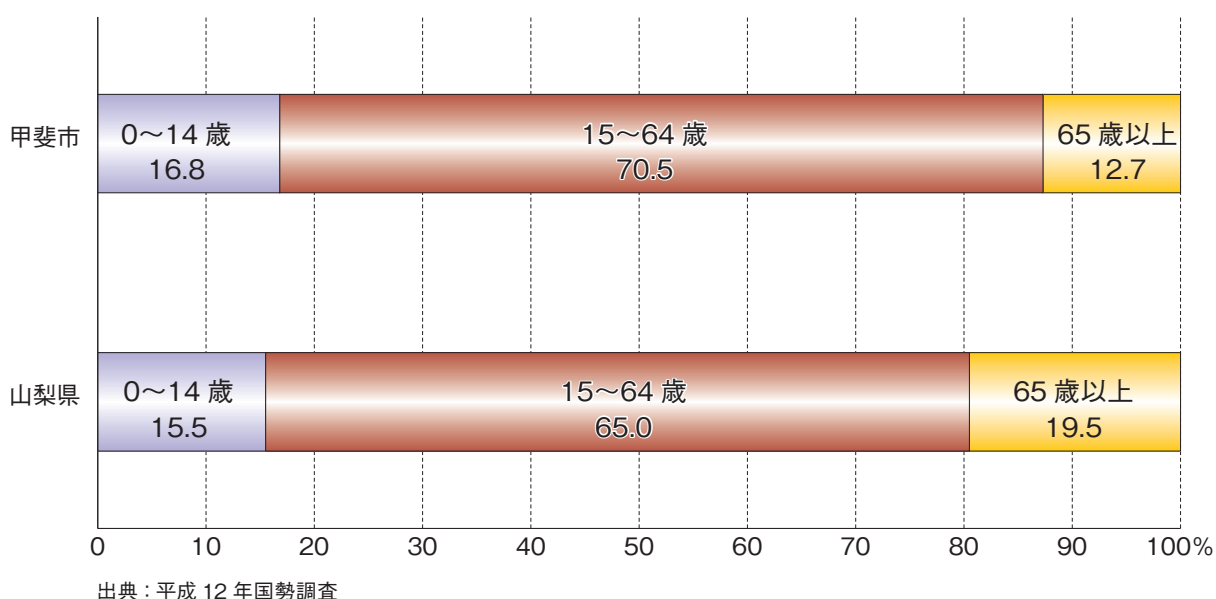
■人口推移



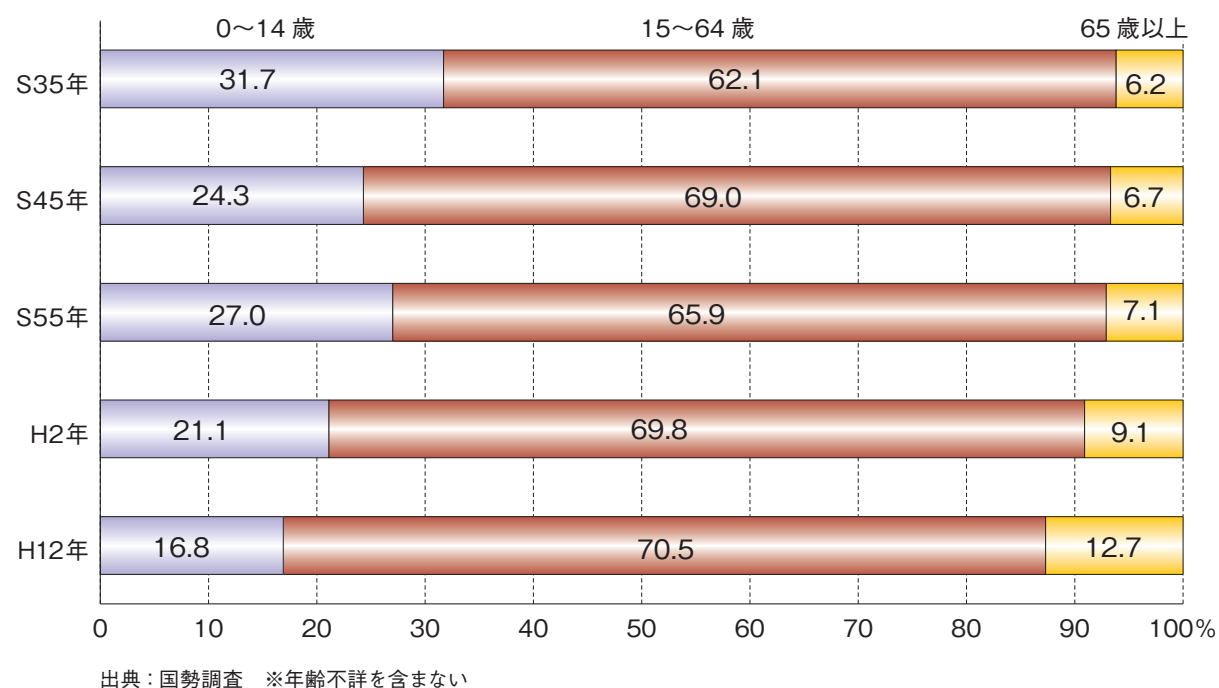
出典：国勢調査

甲斐市と山梨県の年齢3区分別人口の構成比をみると、甲斐市は0歳から14歳までが16.8%、15歳から64歳までが70.5%、65歳以上が12.7%であるのに対し、山梨県は0歳から14歳までが15.5%、15歳から64歳までが65.0%、65歳以上が19.5%となっており、甲斐市は高齢化率が低い地域であることが分かります。しかし、昭和35年（1960年）からの推移をみると、甲斐市の少子・高齢化は少しずつながら進んでいることがうかがえます。

■年齢3区分別人口比率



■年齢3区分別人口比率の推移

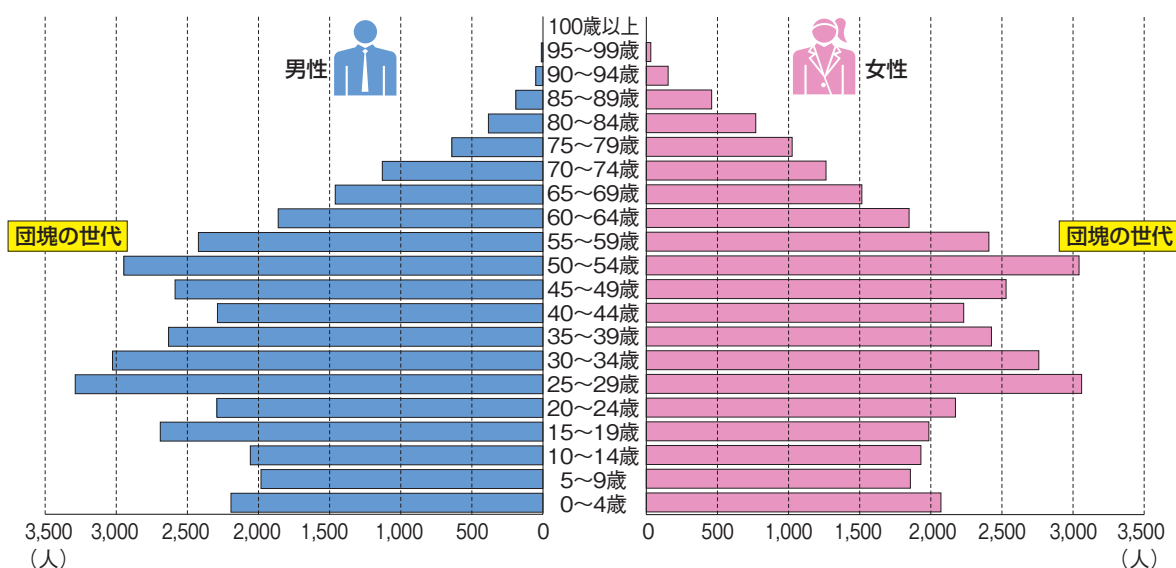


甲斐市の人口と山梨県の人口構成を「人口ピラミッド⁴」で比較すると、山梨県は全体的にピラミッドの形が崩れているのに対し、甲斐市は団塊の世代である50代から100歳までがバランスのとれた形となっており、比較的若い世代の多い、活力ある地域であることがうかがえます。

⁴ 人口ピラミッド

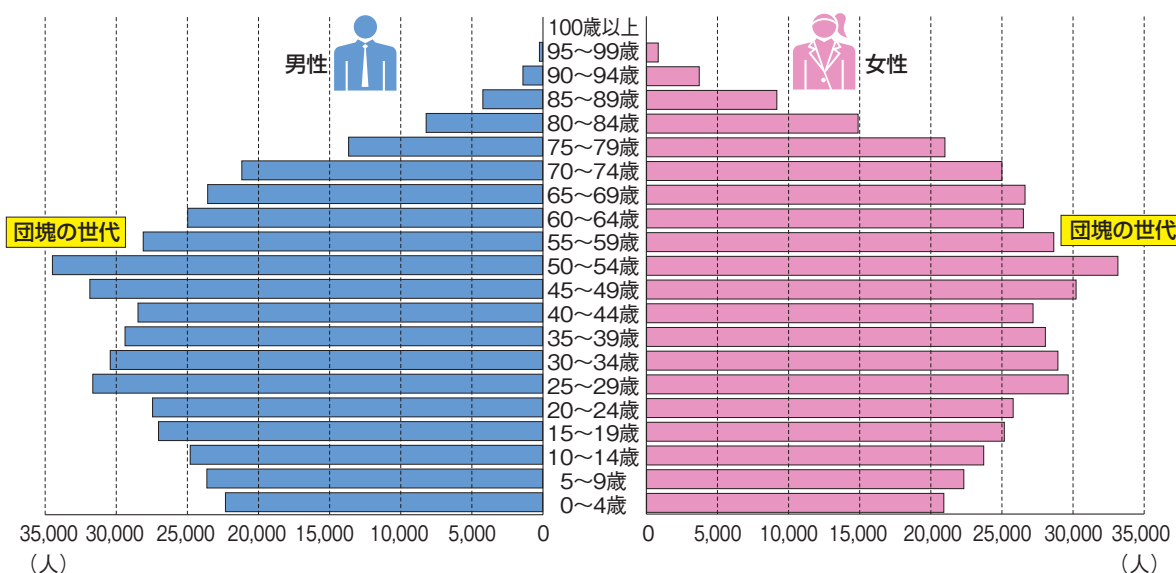
ある時点における年齢階層別人口を上下に、男女を左右に分けて並べた図を言います。一般に多産多死型社会ではピラミッド型になりますが、少産少死型社会では壺（つぼ）型になります。

■甲斐市人口ピラミッド



出典：平成12年国勢調査

■山梨県人口ピラミッド

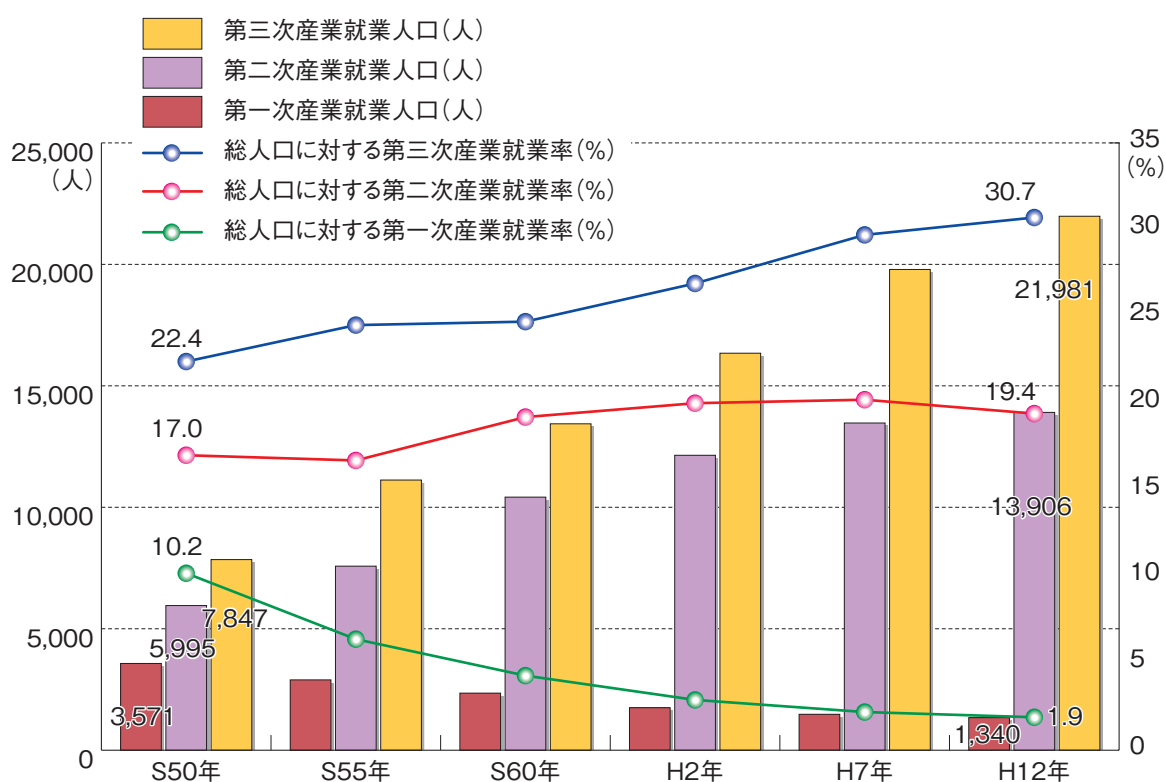


出典：平成12年国勢調査

②産業別人口

下の図は、棒グラフが産業別の就業人口の推移を示し、折れ線グラフが、甲斐市の総人口に占める産業別就業人口の割合を示したものです。昭和50年（1975年）からの産業別就業人口の推移をみると、第一次産業の就業人口が年々減少し、第二次産業と第三次産業への就業人口が増加する傾向にあることが分かります。甲斐市の総人口に対する産業別就業率をみると、昭和50年（1975年）には第一次産業が10.2%、第二次産業が17.0%、第三次産業が22.4%であったのに対し、平成12年（2000年）には第一次産業が1.9%に落ち込み、第二次産業、第三次産業がそれぞれ19.4%、30.7%に増加しています。しかし、第二次産業の就業割合は、わずかですが平成7年の20.2%から19.4%と、減少に転じていることが分かります。

■産業別人口の推移

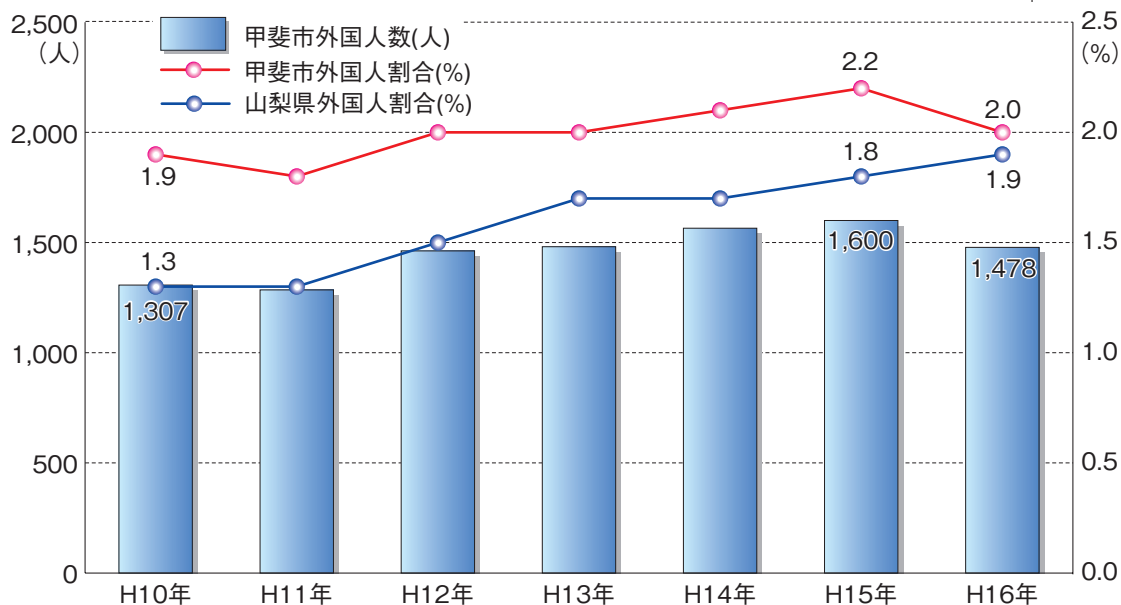


出典：国勢調査

③在住外国人

甲斐市と山梨県の外国人数の推移をみると、平成 11 年（1999 年）以降増加の傾向にあります。平成 16 年（2004 年）において、甲斐市は、平成 15 年（2003 年）の 1,600 人から 0.2 ポイント下降しています。

■外国人数の推移

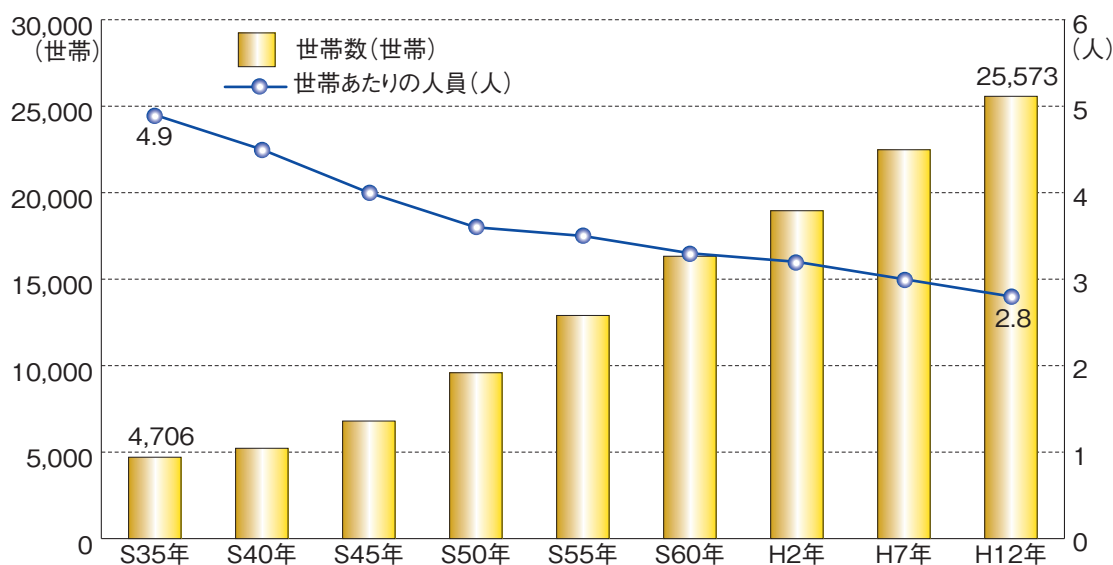


出典：甲斐市市民課資料、在留外国人統計

④世帯

次に、世帯数をみると、年々増加の傾向にあり、昭和 35 年（1960 年）には 4,706 世帯だったのに対し、平成 12 年（2000 年）には 25,573 世帯と 5 倍以上の増加をみせています。一方、昭和 35 年（1960 年）には 1 世帯あたり 4.9 人の家族構成に対し、平成 12 年（2000 年）には 2.8 人にまで減少しています。このことから、市内世帯の核家族化や、単身で生活する人々が増加していることがうかがえます。

■一世帯あたりの人員

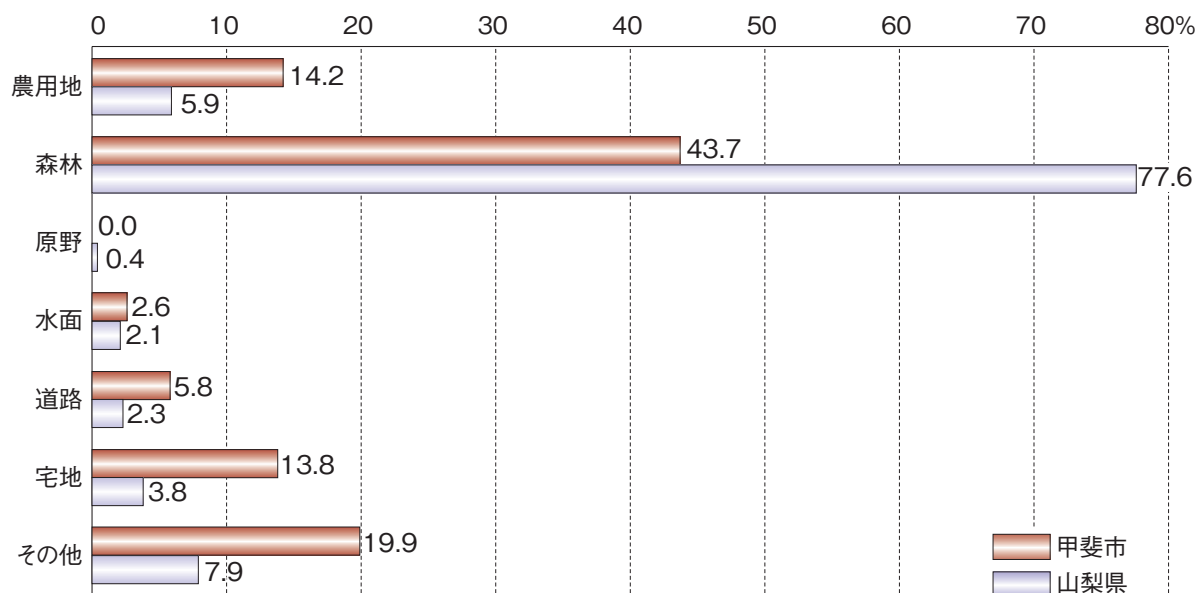


出典：国勢調査

(4) 土地利用

土地利用の割合をみると、甲斐市の面積の43.7%が森林となっており、その他が宅地や農用地として活用されていることが分かります。山梨県と比較してみると、宅地や農用地が多く、森林は県の約半分の割合となっています。

■土地利用割合



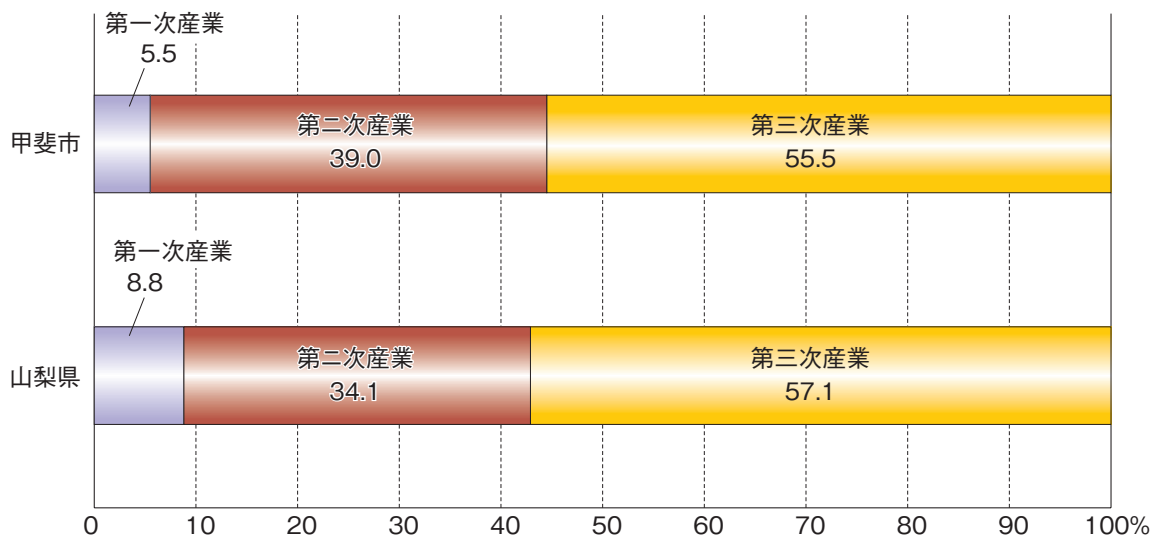
出典：平成 15 年土地利用現況調査

(5) 産業

①産業構造

甲斐市における産業別就業人口の構成比は、第一次産業 5.5%、第二次産業 39.0%、第三次産業 55.5%で、山梨県よりわずかに第一次産業、第三次産業の比率が低く、第二次産業の比率が高くなっています。

■産業別就業人口構成比



出典：平成 12 年国勢調査

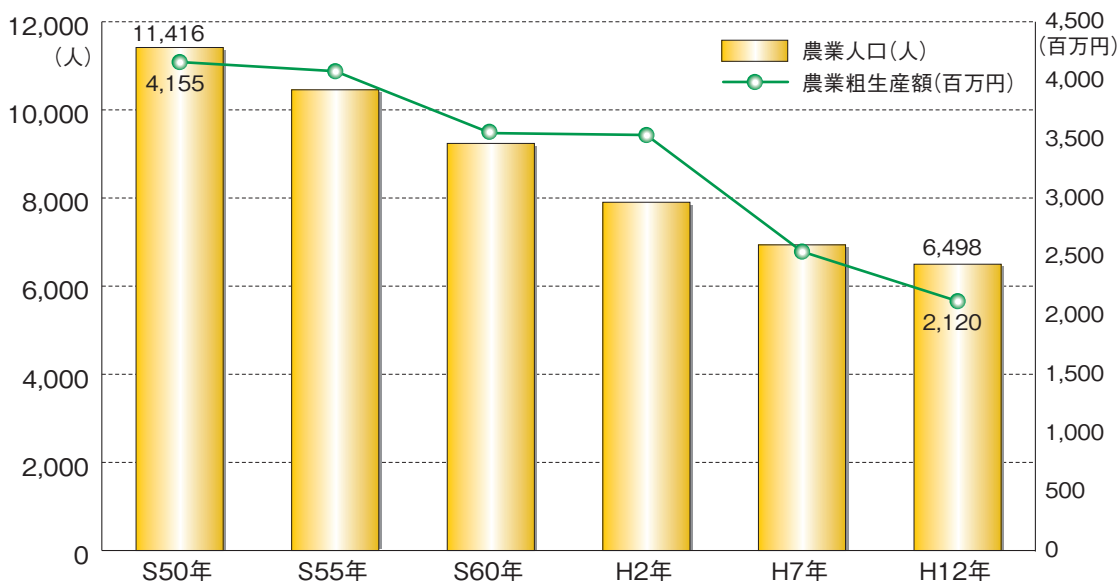
②農業の状況

甲斐市の農業人口と農業粗生産額⁵をみると、年々減少の傾向にあることが分かります。農業粗生産額をみると、果実が 31.4%を占め、次いで米が 26.5%、畜産が 25.4%の順になっています。果樹、野菜（果実的野菜を含む）の出荷量では、果樹部門ではぶどうが 1,204 トンで 1 位、野菜ではさといもが 214 トンで 1 位となっています。

⁵ 農業粗生産額

農家が稲作、野菜栽培、養蚕、畜産などの農業生産によって得た農畜産物と、その農畜産物を原料として作られた加工農産物を販売して得た利益額のことです。

■農業人口と農業粗生産額



出典：農林業センサス

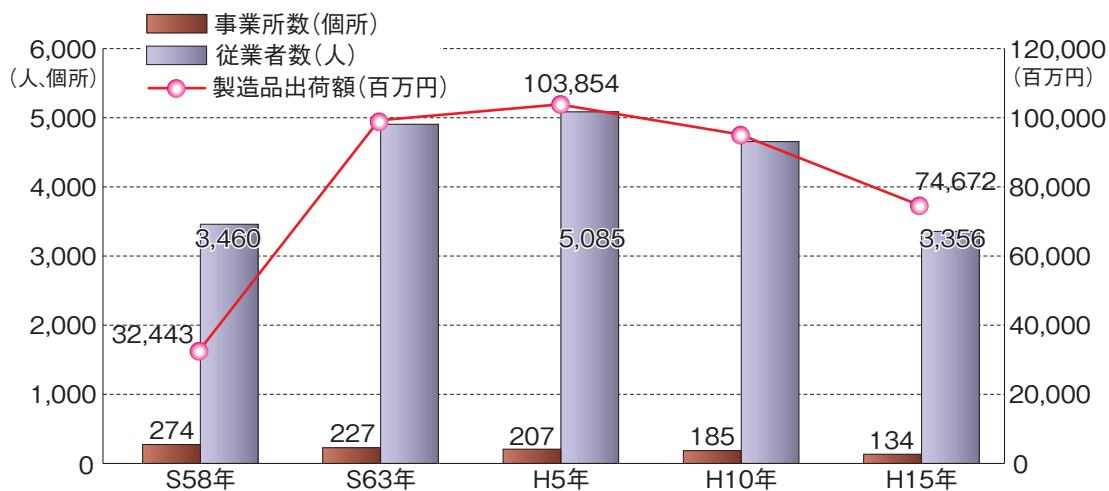
⑥ 製造品出荷額等

その事業所が所有する原材料によって製造された製品の出荷額を言います。

③ 工業の状況

工業統計の事業所数、従業者数、製造品出荷額^⑥等の推移をみると、いずれもバブル経済崩壊後の平成5年（1993年）をピークに下降しています。製造品出荷額等の平成15年（2003年）の状況を県内の市部と比較すると、第七位となっています。

■ 製造品出荷額等推移



出典：工業統計調査

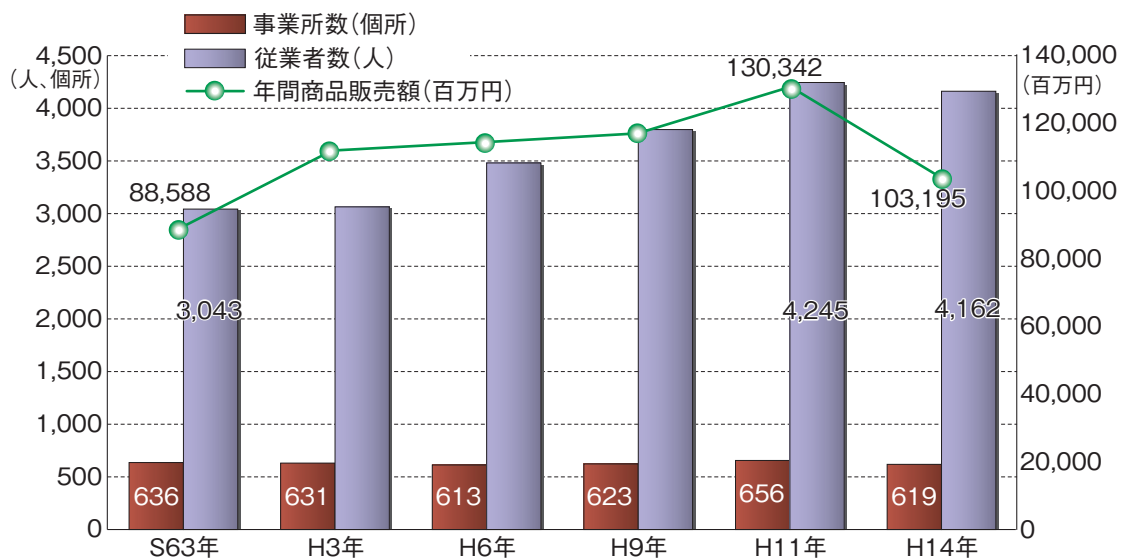
④ 商業の状況

⑦ 年間商品販売額

その事業所における商品の販売額を言います。

商業統計をみると、事業所数、従業者数、年間商品販売額^⑦ともに平成11年（1999年）をピークとして下降を始めています。年間商品販売額では、平成11年（1999年）と比較して平成14年（2002年）は271億4,700万円の大幅な減少となっています。年間商品販売額の推移を、昭和63年（1988年）を100として指数化し、山梨県と比較すると、山梨県は平成6年（1994年）をピークに下降しているのに対し、甲斐市は平成11年（1999年）までは増加の傾向にあったことと、その後急激に減少に転じていることが特徴となっています。

■ 年間商品販売額推移



出典：商業統計調査

⑤観光の状況

甲斐市内には、地区ごとにいくつかの観光集客施設が点在しており、その年間観光客数⁸は、竜王地区が約15万人、敷島地区⁹が約440万人、双葉地区が約80万人となっています。特に、敷島地区において観光客数が伸びているのは、昇仙峡といった有名な観光スポットがあることや、山岳等の自然観光拠点が広く点在しているためであると思われます。

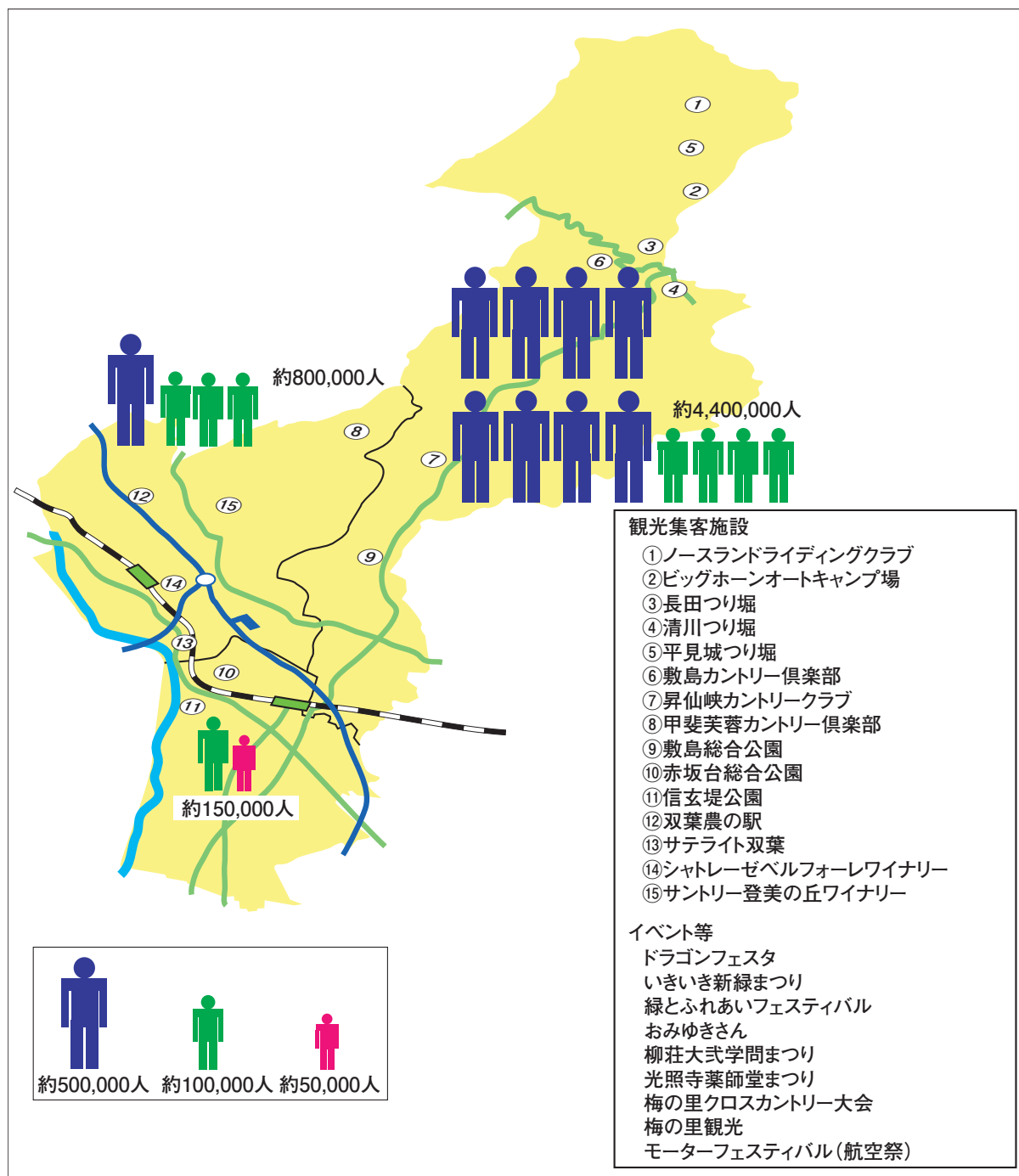
⁸ 観光客数

把握できる範囲での推計観光客数を記載しています。

⁹ 敷島地区の観光客数

市内を通り昇仙峡方面を訪れる観光客の数を含んでいます。

■市内への観光客

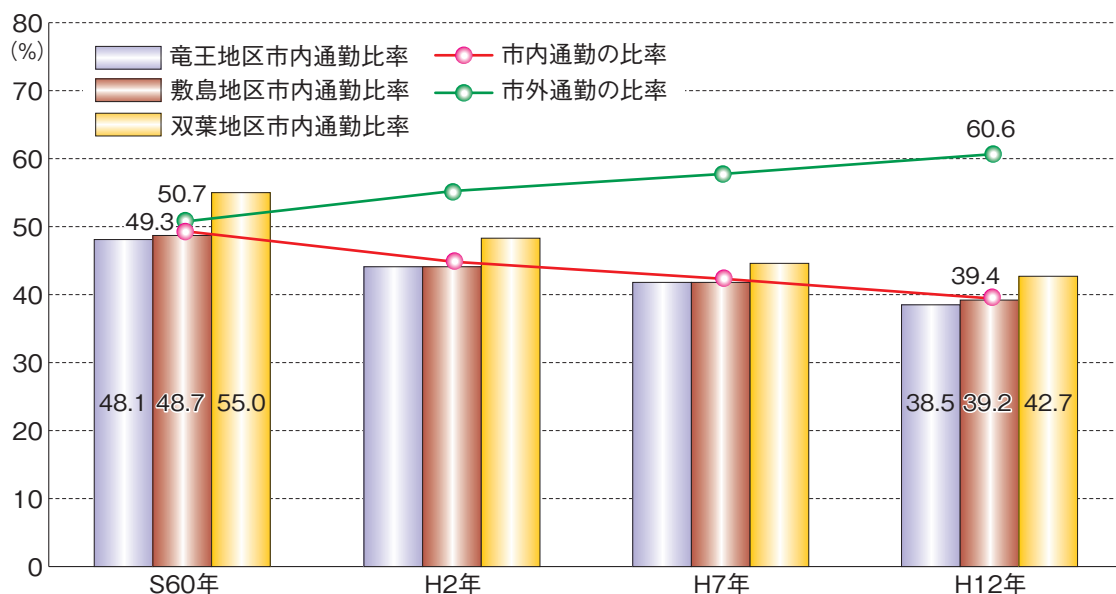


(6) 生活圏

①通勤圏

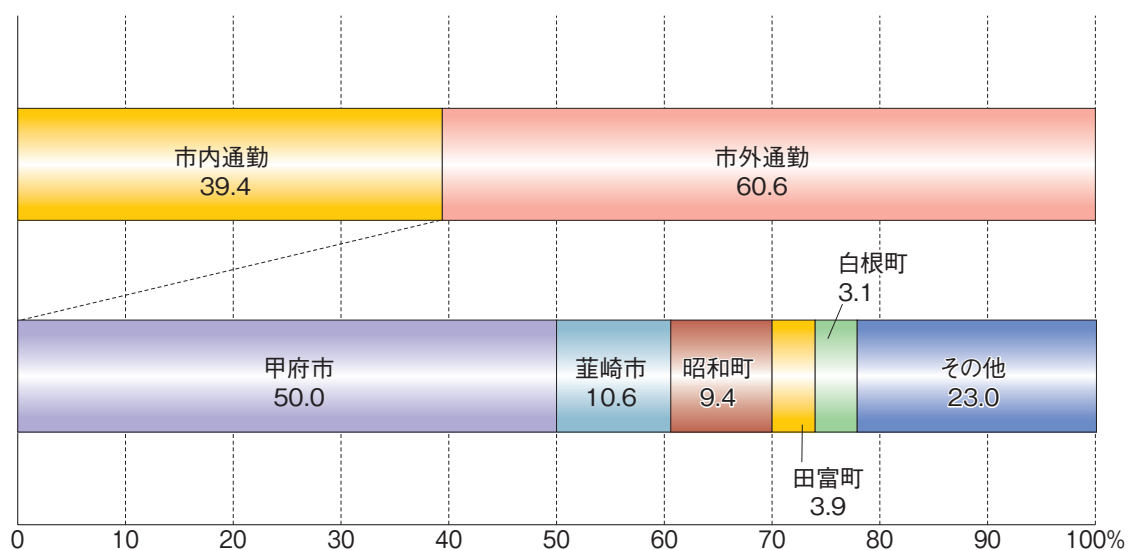
甲斐市内・市外の通勤比率の推移をみると、年々市外へ通勤する人の割合が高くなっており、昭和60年（1985年）には市外通勤者がほぼ半数を占めていたのに対し、平成12年（2000年）には市外通勤が60.6%、市内通勤が39.4%となっています。また、市外の通勤先としては甲府市が半数を占めています。

■市内・市外通勤比率と地区別市内通勤比率の推移



出典：国勢調査

■通勤の割合と通勤先 (H12年)

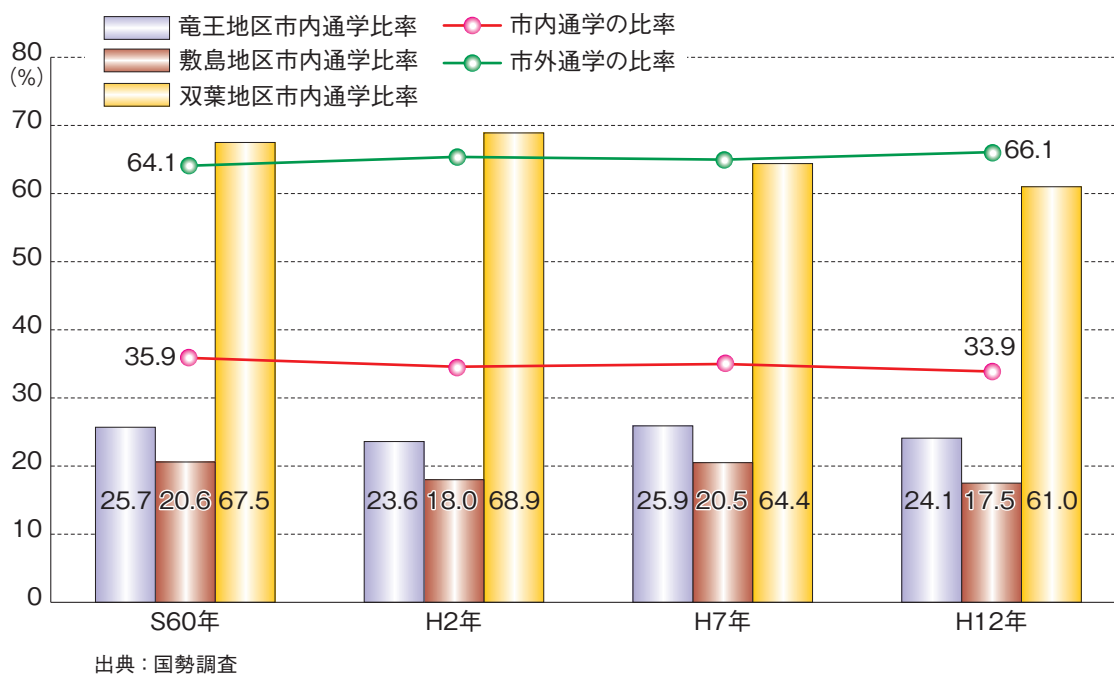


出典：平成12年国勢調査

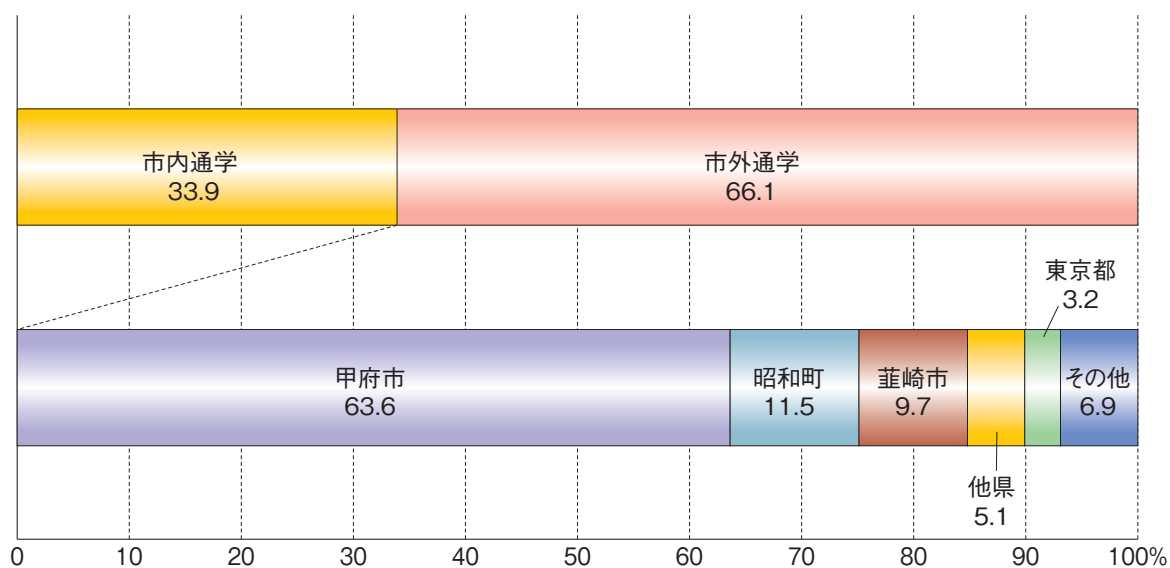
②通学圏

市内・市外の通学比率（15歳以上）は、20年前からほとんど変わらず推移しています。地域別の市内通学比率をみると、双葉地区の市内通学が圧倒的に多く、その他の二地域では市外への通学が多いことが分かります。双葉地区において市内通学が多い理由は、日本航空高校の生徒のうち、地区内にある同校学校寮に住んでいる人が多いことによるものと考えられます。また、市外の通学地域をみると、甲府市が圧倒的に多いことが分かります。

■市内・市外通学比率と地区別市内通学比率の推移



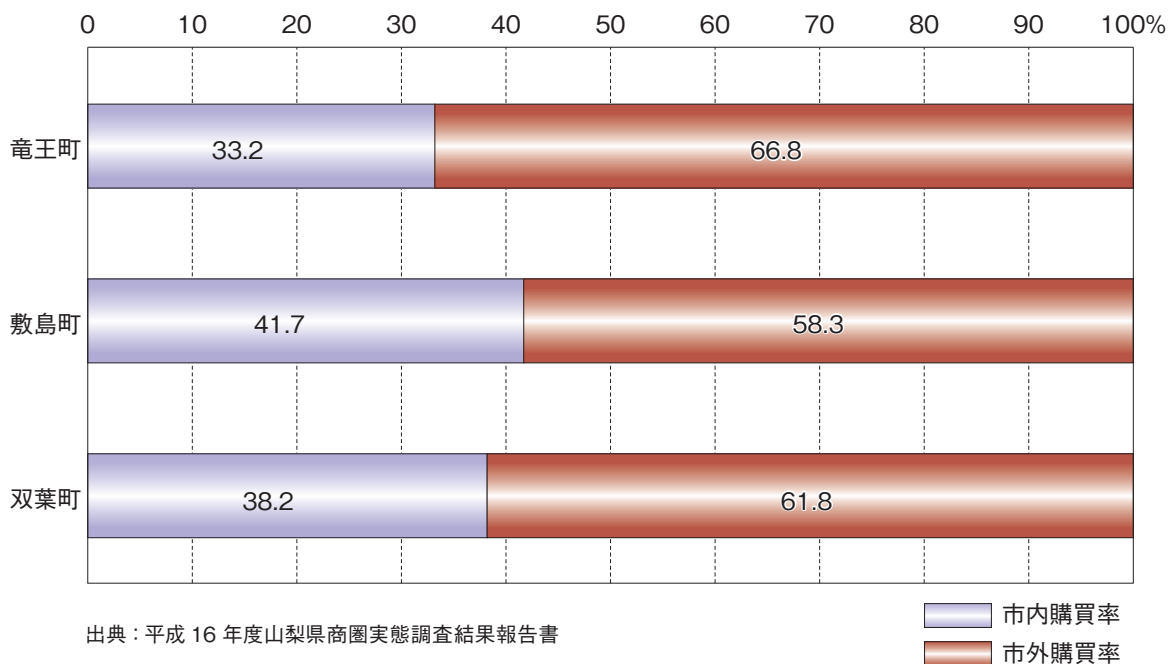
■通学の割合と通学先（15歳以上、H12年）



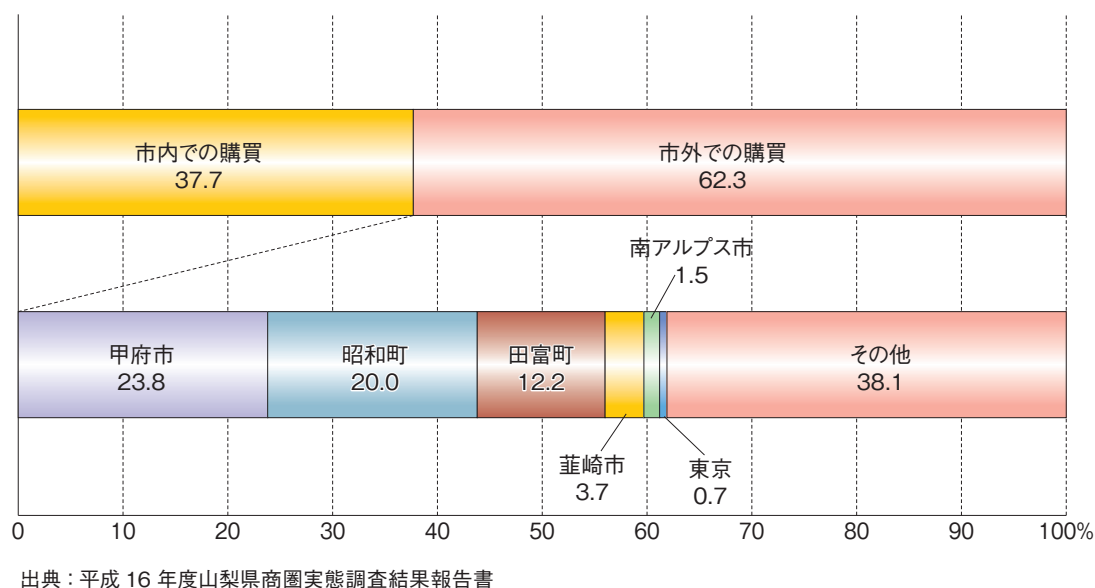
③ 商圈

市内購買率を地区別にみると、敷島地区の市内購買率が他の地域に比べ、41.7%と高いことが分かります。また、市内・市外の購買活動を比較すると、市外での購買が多数を占めています。市外での購買を地区別にみると甲府市が最も多く、次いで近年大型店舗が多数出店した昭和町や中央市（旧田富町）での購買活動が目立っています。

■ 地区別市内購買率



■ 市内購買率・市外購買率の割合



④ 広域行政圏

本市の広域行政の状況は、表のとおり事務、事業によってさまざまな枠組みで実施されています。消防事務については竜王地区と敷島地区は甲府地区広域行政事務組合で、双葉地区は峡北広域行政事務組合で実施し、ごみ処理については竜王地区が中巨摩地区広域事務組合で、敷島地区、双葉地区が峡北広域行政事務組合で実施するなど、複層的な枠組みとなっています。

■ 3 地区の広域行政事務組合等による共同処理の状況

自治体名		消 防	ごみ処理	下水道	し尿処理	水道事業
甲府市		甲府地区 広域行政 事務組合	単 独	単 独	単 独	甲府市が給水
昭和町			中巨摩地区 広域事務組合	山梨県下水道 公社 〔釜無川流域 下水道〕 (公共下水道)	中巨摩地区 広域事務組合	
中央市	旧玉穂町					
	旧田富町					
甲斐市	竜王地区				単 独	
	敷島地区				甲府市 が給水	簡水
	双葉地区				単 独	
韮崎市		峡北 広域行政 事務組合	峡北 広域行政 事務組合		峡北 広域行政 事務組合	峡北地域広域 水道企業団
北杜市						